

風雪の日日

神奈川県 坂本政憲

一 第二の故郷・博川^{ハクセン}

朝鮮・平安北道の南端に博川という町がある。京義本線の孟^{モウ}中^{チュウ}里^リから軽便鉄道で約二十分、博川線の終点である。孟中里には朝と夕方に急行列車が停車したから、片道約一時間二十分の平壤^{ピョングヤン}には日帰りで往き来することができた。孟中里から博川を経由する路線バスで、寧^{ネイ}辺^{ヘン}、雲^{ウン}山^{サン}、北^{ホク}鎮^{チン}などの奥地にまっすぐ行くこともできた。

博川は、豊かな自然に恵まれた美しい町である。西の町はずれに大寧江の清流、南に遙かに広がる米どころの博川平野、北の後背は小高い山に囲まれていたから、気候も比較的穏やかだった。

私は昭和七（一九三二）年三月三十日、坂本家の三男としてこの町で生まれた。町の中心部の丘

の中腹に建つ鉄筋赤レンガ積み、外壁が萌黄色の二階建て洋館が我が家であった。丘の上の斜面を利用した築山風の広い庭には、ライラック、つつじ、れんぎょう、あんず、さくらんぼなどが植えであり、春の開花期には鮮やかな紅色と黄色のつづれ織りを、数キロメートル先を走る軽便鉄道の車窓からでも、くつきりと眺めることができた。

博川は山も川も美しく、自然の豊かさは四季折々、恵みに満ち満ちていた。この地で伸び伸びと過ごした幼少期の思い出は、老年期の今も、私の脳裏に深く焼き付いている。

二 父の志と成功

父、坂本幹平は、明治三十二（一八九九）年八月二日福岡県八幡市で生まれた。地元の高等小学校卒業後、八幡製鉄所で少年工として働いていたが、博川で穀物や絹を手広く商っていた同郷の安井商店店主、安井玄兵衛氏に誘われ、大正三（一九一四）年十五歳のときに単身渡鮮し、住み込みの店員になった。

父の話では、大正初期に北朝鮮の片田舎で、言葉や習慣の違いを乗り越えて現地に溶け込むのは並大抵なことではなく、とにかく朝早くから夜遅くまで働きづめに働いた。自転車に反物などを山積みして、奥地で定期的に開かれる市で売り歩き、後には護身用のピストルを懐に忍ばせなければならぬほどの、多額の売上金を持ち帰るようになった。

大正三年夏に欧州で勃発した第一次大戦が、北朝鮮の片田舎にもじわじわと好況をもたらし、この追い風にも乗って、穀物の取り引きなどで莫大な利益をあげた。

苦節十年、大正十三年には店主から、刻苦勉強と多大な貢献に対し、感謝状と特別功労金一万円が贈られたとのことだ。その年父は、丘のふもとに木造平屋建の家を三軒建て一軒を自宅にして、郷里から加来ハル子を妻に迎えた。ハル子との間に二男一女をもうけたが、ハル子は長女出産後の肥立ちが悪く、二十六歳で夭折した。長女節子は

博川で旅館業を営む長谷家の養女に迎えられた。その後、父は同郷の占部マリエと再婚し、四男三女に恵まれたので、結局九人の子だくさんとなった。

三 孟中自動車(株)の設立と発展

大正七年十一月、第一次大戦の休戦条約が調印され、大正九年ころから日本経済は戦後の長期不況に突入し、安井商店の経営も不況の影響を受け、曲がり角にさしかかっていた。そのころ北鎮で金鉱が開発され、京義本線に接続する輸送ルート確保が急務となったが、孟中里から博川を経由して北鎮に至る道路が、自動車の走行に最も適しているといわれていた。このルートでの貨物輸送はすでに始まっていたが、路線バスの運行はまだ具体化していなかった。

安井氏と父はそこに目を付け、定期路線バスの運行を目的として、昭和に入って間もなく孟中自動車(株)を設立した。安井氏が社長に就任し、父は筆頭取締役として実質的な経営を任された。

路線バス事業の成否は、横浜に工場があるフォード社からのバス購入、各地営業所、車庫、整備工場建設などに要する多額の資金と要員の確保にかかっていた。そのため安井商店は穀物、絹などの商材を、店舗、住居、倉庫などとともに、地元の実業家、兪玄男氏に譲渡して幕を閉じ、経営資源の集中をはかったのである。

その際、安井商店が所有していたフォードのトラック一台は、父が開業した坂本商店に譲渡された。坂本商店は木炭などの燃料、塩・煙草などの専売品を販売していたが、商売の実務は、郡庁に勤めていた朴さんをスカウトして、彼に任せていたようだ。

孟中自動車(株)は開業当初から業績好調で、後に地域を代表する優良企業に育ち、年三割の安定配当を続けたと父が自慢げに話していた。

四 丘の上の瀟洒な家

我が家も家族が増えて、従来の木造平屋建ての家では手狭になったので、隣接する丘の中腹に、

萌黄色の外壁、白い窓枠の三階建洋館を新築した。棟上げのときに餅やおひねりを拾いに行った人の話では、竣工したのは昭和八、九年のことだという。

新しい家の一階は、父の執務兼応接室、広い温突ドルの部屋が三室、日当たりの良い南側にベランダ、納戸、二階は二十畳ぐらいの大広間と八畳の和室という間取りであった。台所から外に出たところに、一冬のキムチや野菜、リンゴなどを貯蔵する地下室があった。丘の斜面を利用した築山風の広い庭は、子供たちの格好の遊び場で、近所の子供たちと日が暮れるまで缶けりや隠れん坊などでわいわいと騒いでいた。

高台に建つ我が家の瀟洒な姿は、子供心にも誇らしく思い、父にとっては成功の証であった。父がこの地を踏んで苦節の約二十年、若いときから現地に溶け込み、現地の人たちからも「坂本ばんぼん、坂本ばんぼん」と慕われた。博川は安井氏と父により開発され発展したと、人々にたたえられるまでになつて

いた。

五 戦争の影

昭和十六年十二月八日、この日朝早く、ラジオから「米英に対する宣戦布告」の大本営発表が流れた。このとき、小学校四年生だった私も子供心に興奮し、早めに登校して寒さも忘れ、校庭で友達と騒いだことを覚えている。開戦当初は破竹の勢いで進撃し、戦勝記念にゴムまりや運動靴が無償で小学校に配られたこともあった。その後、戦況は徐々に後退を強いられ、次第に重苦しい空気が流れてきた。

昭和十七年ころには、戦時経済統制令が敷かれ、平安北道内のバス会社は一社に統合されることになり、父が心血を注いで育てた孟中自動車(株)の名は、そのときに消えた。父も取締役を退いた。坂本商店も次第に商品が手に入り難くなり、配給制度への移行もあって、商売は活気を失っていった。

昭和十九年四月に、私は平壤一中に入学し博川

を離れた。平壤一中に在学中であった次兄は、私と入れ違いに四年生で繰り上げ卒業となり、六月には八幡中学を卒業して、浪人中であった長兄と共に、海軍の甲種飛行予科練習生として長兄は高知に、次兄は鹿児島島の航空隊にそれぞれ入隊した。

昭和二十年八月、ソ連が突然参戦し、満州から避難民が続々と貨車で南下してきた。広島、長崎への新型爆弾の投下も報じられて、口には出せなかったが、戦争はいよいよ最終局面に差し掛かっていると感じられた。

六 終戦

昭和二十年八月十五日、平壤は朝からよく晴れて蒸し暑い真夏日であった。四月から、平壤近郊の飛行場建設現場に動員されていた私は、つかの間の夏休みを自宅で過ごし、久しぶりに学校に戻った矢先のことだった。正午に、戦局に関する重大な放送があると知らされ、校舎前の広場に全員集合した。

天皇陛下の放送は、雑音が多くて聞き取り難く、その内容もはつきりしない個所が多かったが、あとで降伏による戦争終結と知らされた。やっぱりそうだったのか……。それほど驚きはしなかった。しかし、この日を境にして街は急速に変わっていった。

平壤神社は焼き払われ、銅鑼や太鼓を打ち鳴らし「万歳、万歳」と叫びながらデモ行進する集団、あちこちで起こり始めた日本人と朝鮮人の小競り合い、日本語を一切受け付けなくなった電話交換手など、不穏な空気が漂っていた。

二日後の八月十七日になっても電話は通じず、家のことが心配になって、リュックサック一つで帰省することにした。朝早く西平壤を出発する鈍行列車に乗り込むと、車内では満員の乗客が朝鮮語の歌を大声で合唱し、「万歳、万歳」を繰り返していた。片隅で小さくなっていると、「お前は日本人か？」と詰問されたが、危害を加えられるようなことはなかった。

飲まず食わずで、午後三時ごろによく孟中に着き、まっすぐに旧孟中自動車(株)の営業所に向かった。見覚えのある運転手が、すでに満員になっていたバスに押し込んでくれ、やっとの思いで博川にたどり着いた。

家の中は、荷物でひっくり返っていた。父は私の顔を見るなり、こう言った。「内地に引き揚げることにした。八幡の兄貴に電報で住宅の手配を頼んだ」博川に一番強い愛着を持っているはずの父が、こんなに早く思い切った決断をしたことに驚くとともに、容易ならざる事態を予感させられた。予科練に行っていた二人の兄も、数日前には元氣な便りをよこしており、家族全員がそろって引揚げ後の生活を夢見ながら、私も荷造りを手伝った。梱包された荷物は、道を隔てた我が家の大きな倉庫に搬入され、積み上げられた。裏山の頂上にある神社は焼き払われたが、平壤に比べれば街の雰囲気はまだまだ穏やかで、ほっと安堵の胸をなで下ろした。

七 父の連行と家宅捜査

荷造りが一段落した八月末、知り合いの金世淳と大寧江に釣りに出掛けた。早朝、弁当を持って川岸につないである父の小さな釣り船を漕ぎ出した。雲一つ無い紺青の空、すがすがしい朝風が頬に気持ちよく、船は清流を上って行つた。魚は面白いように釣れた。ハヤが銀鱗を見せながら、ぴちぴちと跳ねていた。

太陽が西に傾いたころ、私たちは錨を上げて喜び勇んで帰途についた。川岸に船をつけたとき、一人の朝鮮人が金さんに近付いて、なにやら朝鮮語で話し掛けた。金さんの顔色が変わつたので、何が起つたのか尋ねると、「お父さんが保安署に呼び出され、家宅捜査が入つたらしい」と教えてくれた。ビクの中に魚を入れて大急ぎで帰つた。

家では母が泣いたような顔をして、「お父さんはお昼過ぎに保安署に呼び出され、そのまま帰つて来ないのよ」と言つて、さらに「お父さんが家

を出ると間もなく、二、三十人の署員が家宅捜査に入り、荷物をあの通り」と部屋の中を指していた。せつかく荷造りして室内に置いていた梱包の縄がずたずたに切られて、洋服や着物が部屋中いっぱい散乱し、まるで強盗が荒らし去つたあとのようだった。廊下や畳の上には、土足の跡がはつきり残つていた。梱包した荷物を積み上げた倉庫はべつたりと封印され、二度と立ち入れなくなつてしまつた。その上、金庫の中の現金、預金通帳、貴金属などがそっくり接収された。わずかに、万一に備えて子供たちの腹巻きの中に隠しておいたお金だけが難を逃れた。「お父さんがいない間はあんたが柱だからね……。しつかりしてよ」と、母は私の手を握つて涙ながらに言つた。

間もなくして保安署から電話があつて、「坂本さんは署の方で保護するから、毛布と弁当を持って来るように。それから一切の財産を売つたり他人に与えたりした場合は、坂本さんの命はありませんよ！」と言つたが、その脅すような声がとて

も恐ろしかった。

祖国が敗れ、どの法律も適用されなくなった我々は、どんな仕打ちを受けても仕方がないのか。理不尽なソ連の参戦がなければ、朝鮮半島の分断がなければ、こんなひどいことにはならなかったのではないか。濟んでしまったことが無性に腹立たしくなつて、持つて行き場のない怒りが込み上げてきて、悔し涙がとめどもなく流れた。

父が愛用していた写真機のライカなど、目ぼしいものは次々に没収されたが、そのときは家族が全員無事に日本に帰ることができればそれだけでいいと思つていた。

日が暮れないうちにと、母は毛布と弁当を持つて、恐る恐る保安署に出掛けた。母の話では、元警察官をはじめ、官公吏、教職員、民間有力者など、博川在住日本人男子の約三分の二が連行されているとのことだった。

その日から、私たちは家に閉じこもり、人の出入りも絶えて、外部のことはさっぱり分からなく

なつた。夜は嚴重に戸締まりして、二階の広間で留置場の父をしのびながら、親子八人が肩を寄せ合つて寝た。玄関の方で「カタツ」と音がすると、父が帰つて来たのではないかと何度ものぞきに行つた。恐怖のうちに一週間が過ぎたが、父が帰る気配はなかつた。

その後、私たち中学生五人が弁当を届けることになり、朝夕通い続けた。ある朝のこと、いつものように弁当を持つて行くと、四、五人の日本人が保安署の庭の掃除をしていた。その中に父がいた。二週間近く見なかつた父だが、私はまともに顔を上げることができなかつた。青白い顔をしてやせかけた父が近寄つて来て、「皆元氣かね！」と声を掛けてくれた。「はあ」と答えるのが精いっぱい、弁当を渡すと「お父さんも体に氣を付けて」と言つて、足早に署を出た。久しぶりに父に会えた喜びはどこへやら、父の哀れな姿を見て、ただ、ただ悔し涙が頬を伝わつた。

その後、留置されていた官公吏、教職員など、

元警察官を除く民間人が次々と釈放されたが、しかし、父は帰って来なかった。半ば名誉職として警防団長や在郷軍人連合会博川分会長などの公職についていたのが響いているのではないかと、朝鮮人の古老から聞かされた。

十月七日の夜、保安署員が父の手紙を届けてくれた。それには「明日は詔子ちゃんの満一歳の誕生日ですね。もうすぐ帰れると思うから、くれぐれも子供たちには気を付けてください」と、書かれてあった。母も朝な夕なに「寒くなってきたが、お父さんは大丈夫かしら……」と気遣う毎日だった。

それからしばらくして、父たちはソ連軍のトラックでどこかに連れて行かれた。保安署から、もう博川にはいないから弁当は不要と通知されたのである。どこに連れて行かれたのか全く手掛かりはなく、平壤で銃殺されたとか、シベリアに送られたとか、様々なうわさが家族を不安に陥れた。

八 自宅接収と集団生活

間もなく、博川在住日本人約二百人は、十軒ぐらゐの家で集団生活することになり、目ぼしい家は次々に接収された。我が家は真つ先に接収され、共産党本部として使われることになったため、二十四時間以内の退居を命ぜられた。だれのためにも借りられず、女子供だけでは、短い時間内に持ち出せる荷物には限りがあった。寒さに向かう折柄、冬物の衣類や寝具類を中心に、当面の食料品や燃料を持ち出すので精いっぱいだった。あとになって、革のトランクやポストンバッグなど、高価で売れる物を惜しげもなく放置してきたことがすごく悔やまれたが、もうあとの祭りだった。家は次々に接収され、三度目に移ったところでは、川岸に住む大工さんが、自宅の離れに温泉を改造して迎えてくれた。大寧江の氷の上を、そりを引いて渡る牛や、リンクを造ってスケートを楽しんでいる朝鮮人の少年たちの姿が窓から見渡されて、しばし心が和んだ。

週に一度開かれる市では、街の広場に露店が並び、店頭には商品があふれ、大変な人出だった。

この日に一週間分の食料品を買い込むのだが、売り食いのためリュックサックの中身は軽くなる一方だった。正月には母が着物を売って、わずかながら餅もつき、父と二人の兄の陰ぜんを供えて寂しい正月を過ごした。

九 父、奇跡の生還

一月二十六日は、弟、千明の十回目の誕生日だった。その翌日、太陽が西に沈みかけたころ、何の前触れもなく、突然に父が帰って来たという知らせが飛び込んできた。孟中自動車(株)の整備主任だった貞さんが、孟中里の営業所にひよっこり姿を現した父を見付けびつくりして、すぐ会社の車で送ってくれたのだ。貞さんは家の近くで遊んでいた私に近寄ってきて、にこにこ顔で「お父さんは保安署に挨拶してからこちらに来られるので、もうすぐ会えますよ!」と知らせてくれた。「えっ!」と我が耳を疑ったが、信じられなかつ

た。次の瞬間飛んで帰って、母に「お父さんが帰って来たらしいよ!」と息せき切って伝えると、「本当?」と母も半信半疑の様子ですぐに飛び出して来た。「坂本さんが帰って来た」というニュースは、瞬く間に夕闇迫る博川の町に広がり、大勢の人が集まってきた。

ようやく姿を現した父は、白毛混じりのひげをぼうぼうに生やし、見知らぬ三人の男を連れていた。真っ黒に雪焼けした顔をにこにこさせながら、「只今帰って参りました。留守中は大変お世話になりました」と挨拶したときは、本当に帰って来たんだなと実感し、全身がふるえた。「欣喜雀躍」とはこういうことなのか。まさに飛び上がらんばかりの喜びであった。母と姉は涙ぐんで言葉にならなかつた。弟や姉たちは、いつまでも父にまとわり付いていた。その夜は次々と客が訪れて話はいつまでも尽きなかつた。

十 父の抑留生活

父の話によれば、父たちは平壤郊外の三合理収

容所に送られ、一カ月後には日本に帰すというところで平壤から有蓋貨車に乗せられたとのことだった。列車は、平元線を東に向かつて走っていたので、皆、元山か咸興で船に乗せてくれるものと信じ切っていた。ところが、元山でも、咸興でも、ちょっと停車しただけですぐに発車し、豆満江の鉄橋を渡ったときには、いよいよシベリア行きを覚悟したとのことだった。その後、ソ連軍管下の延吉収容所さんきやうでは、炊事用のたきぎ取りや水くみだけで、他に特別な作業に従事することもなく、十二月三十一日の夕方まで収容されていた。この間に栄養失調になる者が多く、発生した虱が発疹チフスを媒介したので、死亡者は日毎に増えたが、土はかちかちに凍っていて鶴嘴くわばしも歯が立たず、砂地のところを浅く掘って遺体を並べ、その上から雪をかぶせるだけだった、と話した。

十一 突然の釈放

十二月三十一日の午後四時ごろに、「軍人と警察官を除いて全員営門に集まれ！」と言われて、

取るものも取りあえず外に出て整列すると、一人のソ連兵が先頭に立って門の外へ連れ出し、五、六百メートル歩いたところで突然に、通訳を通じて「諸君は釈放された。自由行動をとれ！」と宣言して帰ってしまった。着の身着のまま、暮れかかった雪の荒野に放り出されたのである。皆、呆然としていた。釈放された喜びよりも、これからどうすればいいのかと途方に暮れていた。父は同じ班にいた寄る辺のない三人を連れて、博川に帰る決心をした。

その夜は、地元の日本人会に宿泊し、元日の日の出を待つて、北朝鮮の現住地に向かう人たちと共に一斉に南下した。昼は雪深い山野を行軍し、夜は民家や農家に泊めてもらい、二週間後にやっと羅南にたどり着いた。

ここからは、今回の釈放者五、六百人が列車で平壤まで輸送されることになり、一月十六日羅南を出発した。父たちは一月二十二日に順川で途中下車、博川に向かったのだった。苦難の行軍中に

も、飢えと寒さと過労のため死亡者が続出したが、列車に乗ってからも死亡者が相次ぎ、主要駅に着くたびに死体が降ろされた。

父は狩猟が趣味で、以前から秋から冬にかけて犬を連れては山野を駆け回っていたから、体力には自信があつたのだろうが、何よりもわずか十五歳で北朝鮮に渡り、今日を築き上げたバイタリティーが、少々のことではへこたれない気力が、この奇跡とも思える生還を支えたのに違いないと、改めて父を敬服したことだった。

十二 死の恐怖 発疹チフス

家族が喜び合つたのもつかの間、これからの生活を考えてと暗たんたるものがあつた。父は、私たちがこれほどの窮乏生活に追い込まれているとは知らず、生来の世話好きから三人を誘つたのであろう。そのうえ早々に、父も連れて来た三人も、それに母と私を含む子供五人の計十人が、発疹チフスでばたばたと倒れてしまった。高熱と全身の発疹で、死の恐怖にさらされた。だが、い

つ息絶えてもおかしくない状態が続いた。幸いにも旧知の金世淳さんが、親せきの薬局から高価な薬を手に入れ、夜に密かに届けてくれたり、避難民団の中にいた医者が何度も往診して懸命に治療してくれたお陰で、奇跡的に一人も死なず一カ月ぐらいで全員回復したが、本当に幸いであつた。

十三 海路脱出

父の回復を待つていたかのように、三月に日本人会が結成され、父が会長の重責を担うことになった。我々の売り食い生活には限度があり、一日も早くここを脱出して、日本に帰る方法を探ろうという気運が高まつてきた。早速父を中心に、日本人会の帰国運動が始まった。父は毎日のようにソ連軍の本部を訪れ、カピタンに実情を打ち明け黙認を要請した。ソ連軍と保安署の両方の黙認を得るためには、かなりの資金を必要としたようだが、皆が助け合つて熱心に運動を展開した結果、六月に入つてついに黙認が約束された。陸路の脱出にはいろいろな困難が予想されたので、

帆船で大寧江を下り、黄海に出て三十八度線を突破し、仁川に上陸する計画が進められた。その結果、博川在住者二百十三人のうち、百四十五人が第一班として七月十五日に、残りの六十八人が第二班として七月二十日に出発することになった。

私たちは第二班だったので、第一班の出発を郊外の船着場で見送った。出航間際に父が、一年間の労苦をねぎらい、航海の安全とご多幸を祈る旨の簡単な挨拶をした。送る者、送られる者、ともに込み上げてくるものがあり、すすり泣きも聞こえていた。船は静かに岸壁を離れていったが、私たちは船体が見えなくなるまでハンカチをふり続けた。

二十日には、いよいよ私たち六十八人の第二班が出発した。第一班を見送った同じ場所に、船は横付けされていた。保安署の厳しい眼を盗んで、わざわざ見送りに来てくれた朝鮮人数人が、父たちと最後の別れを惜しんでいた。

ついに船はいろいろな思い出を残して岸壁を離

れた。父が初めてこの地を踏んで三十二年、営々と築き上げた名誉も、当時百万円と見積もられていた巨額の財産も、すべて失い、子供七人を引き連れてわずかな身の回り品だけで、今、博川に別れを告げようとしている。それでも親子九人、全員無事で博川を離れることができたのは、なんと幸いなことか！ 不思議に恨みはなかった。美しい町博川、思い出の町博川、博川よさらば！

船は大寧江の流れに乗って、滑るように下って行った。海の上では、風があるときは帆をいっばいにふくらませ快走したが、風が止まると水夫たちは櫓を使ったが、こいでもこいでもほとんど前には進まなかった。こんなときには、北朝鮮の警備艇が追っかけてくるような気がして、不安が一層募ってきた。

途中、飲料水の不足に苦しみながら、十日目の午後の干潮時に、船は遠浅の海の沖合い数キロメートルのところまで砂地の上に座ってしまった。

船頭がすでに三十八度線を越えており、次に潮が

満ちてくるのは明日の十時ごろというので、私たちは男女十人ぐらいが、水筒、やかん、バケツなど持てるだけのものを持って、飲み水を探しに上陸することになった。船から陸までは見た目以上の距離があり、歩けども歩けどもなかなかたどり着かなかつたが、水を求めて必死になって歩き、夕暮れ迫るころにやっと上陸した。現地の人たちは親切に対応してくれたが、だれかの通報で警察から、「明日必ず船とともに接岸するように」と厳しく命ぜられた。ここが、三十八度線以南の延長白郡海城という村であることも知らされた。持てるだけの水を持って船の灯りを目印に帰りを急いだ。「おーい！ おーい！」と叫びながら歩き続けて、やっとのことで船に戻った。船に残っていた人たちにも、たつぷりと水をのんでもらい、久しぶりに船のかまどでご飯を炊いて、お腹いっぱい食べた。

そのころになると、警察に通報されたことが船頭にも知られ、船内は不穏な空気に包まれた。団

長の父が船頭と話し合った結果、明朝夜明けとともに我々は全員ここで下船して、ゆっくりと時間をかけて上陸する。船頭たちは潮が満ちてくるのを待つて、早々に北に向かって逃げることに話が落ち着いた。

翌日、リュックサックを背負い片手に大きな荷物を持って、子供や年寄りを助け、励ましながら、全員が上陸を果たしたのはお昼ごろだった。振り返ると、沖の船影はもう見えなくなっていた。警察に出頭した父は、北朝鮮の船を逃がしたということ、こつぴどく叱られたようだが、はるか沖合いで下船を強いられた我々は、被害者であると主張して、なんとか矛先を収めてもらった。その夜は学校の講堂で、蚊の猛襲に悩まされながらも、思いつ切り足を伸ばしてぐっすりと眠った。

翌朝、トラック二台に分乗して延安に行き、そこから開城、議政府のテント村を経て、八月二十三日に釜山からアメリカの「リバティ型貨物船V

〇〇四号」で博多に向かった。

博多湾で、一週間の検疫中に疑似コレラ患者が出たため、博多の街の灯りを目前にしながら、さらに二週間の沖待ちを余儀なくされた。やっと博多の土を踏んだのは、博川を離れて五十六日目の昭和二十一年九月十四日であった。

板子一枚に命を託して博川を離れた六十八人は、一人も欠けることなく無事博多に上陸することができた。祖国の土を踏んで涙を流す人もいたが、朝鮮で生まれ朝鮮で育った私には、「祖国」という実感がわかかなかった。父が延吉から連れて来た三人も元気でそれぞれの郷里に向かった。

十四 日本での新生活

私たち親子九人は、取りあえず八幡市内の父方の本家に身を寄せた。伯父たちは「よくぞ無事に帰って来た」と、涙を流さんばかりに喜んでくれた。終戦直後に父が打った「住宅配頼む」の電報は確かに届いていた。しかし、この電報を最後に、引揚げまでの一年あまり通信は完全に途絶し

たまま、生死不明の状態が続いていたのだった。

復員した二人の兄も、親たちがいつごろ、どんな状態で帰って来るのか、予想もつかないまま日々の生活に追われているようだった。伯父は、市内竹下町の奥まったところに、三部屋の木造住宅を心づもりしてくれていたが、すぐに入居できる状態ではなかった。もちろん買収する資金も無ければ、高額の家賃を払う力も無かった。

伯父には、いくら本家の跡取りとはいえ、こんなに世話になっていいのかと思うほど、後々までに大変お世話になった。その背景には、戦前伯父が緊急に多額の資金を必要としたとき、父が八幡市内に所有していた景勝地を処分して、危機を救ったことがあったということを知られたのは、ずつとあとになってからのことだった。伯父はそのことに強い恩義を感じ、今度は自分が幹平一家を助けるんだと心に決めていたようだった。

帰国当初は、お墓参り、あちこちの親せき、知人宅への挨拶回り、帰国歓迎宴出席などで結構忙

しく、落ち着かない日々を過ごしていた。そのうちに、親せきや知人から中古の家具、寝具、衣料品、台所用品、食糧などが次々と寄せられて、なんとか新生活の準備が整ってきたようだった。

十月に入って竹下町の家も空き、若干の補修をした上で、私たちはこの家に移った。一つ屋根の下で、自分たちだけで暮らすのは、博川のあの我が家を追いついて以来のことだ。やはり心弾むものがあつた。そして、姉は八幡高女三年に、私は八幡中学二年に、それぞれ一年遅れで転入した。

伯父のお陰でなんとか住まいが確保され新生活が始まると、両親は七人の子供たちをどうして食べさせていくかという厳しい現実面に直面することになった。父は、伯父の友人から提供された市内黒崎のバラックの小さな店舗で、金物、荒物の販売や、菓子類の仲卸しなど、いろんなことに挑戦していたが、どれも家族を養っていきけるだけの収入は得られなかったようだ。

私も親の苦勞を察して、休みにはハムメーカー、鉄工所、窯業工場などでアルバイトをして、稼いだお金の一部を家計に差し出した。姉や弟たちと田舎に買い出しに出掛け、リュックサックに甘藷^{サツマイモ}などをいっぱい詰め込んで、満員列車のタラップにぶら下がって帰って来たこともたびたびあつた。

十五 就職

そうこうするうちに、私は八幡高校三年生となり、二期期には将来の進路を決めなければならぬときがきた。友達も多くは地元の八幡製鉄への就職を希望し、大学に進学する者も卒業後に八幡製鉄に就職することを望む者が多いようだった。だが、よそ者の私には、歴史ある大企業の城下町には何となく違和感があつたので、進学するにせよ就職するにせよ、この街から出て行きたいと思つていた。しかし、まだ世の中が落ち着かないときに、家を離れて自分で学費や生活費を稼いで勉強を続ける自信も無かつた。

そんなときに、大阪商船という会社から、学校に求人案内が舞い込んできた。奉天や大連の親せきが大连航路の船を利用していたことから、会社の名前ぐらゐは知っていたが、求人案内もスマー卜で好感が持てたので、この会社に一旦就職して二年ぐらゐの間にお金を貯めてから、もう一度考えてもいいかなと思ひ、担任の先生に受験したいと申し出た。半ば運試し、力試しのつもりで受けたこの試験で、門司支店関係だけで約百二十人の応募者があり、その中の三人に選ばれて、大阪の本社経理部配属となつた。本社での入社式に出席してみると、同年入社二十数人の同期生の半数はそうそうたる大学卒であつた。そうした人たちの中にいる自分の将来を思うと、二年後には何としても出直さなければならぬと心に誓つた。

ところが二年近く経つたとき、私は肺結核を患ひ右肺上葉を切除して、一年間休職することになつてしまつた。将来の夢も希望も断ち切られる思ひであつた。そして、思ひ悩んだ挙げ句、かく

なる上は逃げず自分をしっかり見詰め直し、はつきりした自分の考えと広い視野を持つて、この会社で頑張るしかないと覚悟を決めた。しかし、サラリーマン生活の中での二年間の休職は、予想以上の大きなハンデイとなつて、つらい日々が長く続くことになつた。

後年、このときの輸血が原因と思われるC型肝炎により、入院を繰り返すことになろうとは夢にも思わなかつた。

十六 パン工場の経営と廃業

家では、昭和二十八年春、弟、幸男が一橋大学に合格した。これと相前後するように、伯父を介して八幡市上本町で営業中の製パン工場を引き継いで、経営してみないかという話が持ち込まれた。学校給食と八幡製鉄購買会に納品するパンの製造がメインだつた。

工場買い取りの資金ができるまでは、ちよつと高めの家賃を払うことで合意されたようだつた。製パン技術の無い素人経営には不安もあつたが、

弟たちの学資を得るために、なんとか頑張るしかないと考え乗り出したのであろう。昭和三十年には二番目の弟、千明が続いて一橋大学に合格、両親は大喜びし、私も自分のことのように喜んだが、二人分の学資送金は並大抵なことではなかったと思う。

昭和三十五年ごろになると、食生活の向上もあって、「坂本製パン」の商売は次第に先細りとなり、新たな設備投資もままならぬため、早めに店を閉じることになった。戦後を子供一筋に頑張りに通した両親は、市内帆柱山のふもと、花尾町の高台に小さな借家を見付け、そこに子供三人ともに移った。家は古く狭かったが、洞海湾を見下ろす眺めがすばらしく、とても気に入ったようだった。

子供たちも、末の妹、詔子が昭和三十八年春、高校を卒業して三井物産に入社したのを最後に、全員社会人となって親元を巣立っていった。

十七 社会人生活の終止符

平成九（一九九七）年六月、私は商船三井の広報専門の子会社の社長を退き、二年後には完全フリーとなってサラリーマン生活に終止符を打った。私の四十七年に及ぶサラリーマン生活の後半は、昭和四十九年春から秘書課長、秘書役広報室長、子会社の社長、相談役を歴任、今にして思えばこの二十三年間は、自分の持ち味を生かした納得のいく仕事ができた。良き上司、良き部下にも恵まれ、充実した日々だったとつくづく思う。

「終わり良ければすべて良し」、最後に何よりのご褒美をいただいた。

十八 父の死 母の死

平成十三年八月二十六日午後、妹、詔子より「母死す」の知らせが届いた。私は、長年患っているC型肝炎治療のため、東京の北里研究所病院に九月三日の入院を予約していた。「大丈夫かな？」という主治医の心配を振り切って、喪主としての責任感からその日の夕方九州に飛んだ。機

中では、昭和二十年八月末に父が連行されたときの涙ながらの母の言葉、「お父さんがいない間はあんたが柱だから……」が、つい昨日のこのように思い出された。

その父は、昭和四十七年一月三十日、脳溢血のために急逝した。享年七十二歳だった。ひとたび功成り名遂げた者がどん底に突き落とされ、そこからはい上がることがどんなに難しく、つらく、無念なことであつたらう。結局再起の夢を私たちに託して退いた父にとつて、帆柱山のふもとの小さな借家で、母と二人細々と暮らした晩年は、ようやくたどり着いた心安らかな日々だったのでないだろうか。それにしても父には、せめてもう十年長生きしてもらいたかった。そのことがとても残念で、いつまでも心のどこかに引つ掛かつている。

母は、父が気に入っていたこの家から送り出したいと言い、私たちも母の意向を尊重した。生前の父、とりわけ戦前の父を思えば、ちよつと寂し

い葬儀であつた。

母の葬儀は八月二十八日に行われた。近親者だけで静かに送りたいと思つていたが、思いがけず大勢の人が参列してくれた。引揚げ後、大変お世話になつた人たちはもうこの世にはいないが、次世代の子供たちが大勢来てくれた。たくさんの花も寄せられた。葬儀の終わりに、私は喪主として次のように挨拶した。

「母は父とともに、昭和二十一年に七人の子供を連れて北朝鮮から引き揚げ、戦後を子供一筋に生きてまいりました。昭和四十七年に父が亡くなり、すでに三十年近く経つていますが、最近母はしきりに父のことを口にし、早く父のもとへ行きたい。早く迎えに来て欲しいと申しております。亡くなりました八月二十六日の朝には、長年趣味にしておりました詩吟の『川中島』を朗々と吟じまして、周りの者をびつくりさせましたが、お昼過ぎに三人の娘に看取られて、まさに眠るが如く、安らかに父のもとへ旅立ちました。」

最後になりましたが、母が九十六歳の天寿を全うすることができましたのも、私ども子供七人が一人も欠けることなく今日を迎えることができたのも、ひとえに皆様方の温かいご支援のおかげであり、改めて深く感謝し厚く御礼申し上げます」

「次第でございます。有り難うございました」

「深々と頭を下げ、溢れ出る涙を止めることができなかつた。」